

T先生あるいは勲章と蔵書の関係

図書館長 松田 潤

『日高六郎・95歳のポルトレ』(新宿書房, 2012)を読んでいて、思い出したことがある。T先生のことだ。ぼくがまだ学生だった頃だ。毛沢東の「若くて、貧しくて、無名な者は革命家になれる」という言葉に現実感があつた時分だ。文学部は投石から護るという目的で金網に覆われていた。授業が再開されたものの、日常に戻る気分が起きないままにぐずぐずしながら、学科で友人ととめどない話をするか、三本立ての映画館で夜になるという日々だった。

よく聞こえない声でボソボソ講義をするT先生の授業を取らないと卒業単位が不足すると判った。2、3回後ろの席で講義を聴いたが、聞こえない上に中味もさっぱりということで、友人と示し合わせて読書会で『青銅の騎士』のエッセイを書き、これで単位をくれとねじ込んだ。今思い出しても顔が赤くなる。先生も困っただろうが、可をくれた。でも生意気盛りは、割によい文が書けていたはずなのにと不満だった。

単位は揃ったが、卒論を書き上げることが出来ずに結局留年するのだから、しょうがないものだ。

ぼくは縁あって、母校の研究所(T先生は初期の所長だった)で資料助手として勤めることになった。もっぱら日本で発表された文献目録を作成し、研究動向調査のようなことを続けていた。数年後T先生の退職記念号の著作目録を作ることになった。先生が戦後比較的早い時期に書かれたものに平凡社『世界史事典』(1951-1955)の項目があつた。全25巻を項目執筆者Tの名を追いながら読み進むと、日本と各国の研究史が比較整理されており、先生の業績をようやく理解できたと思つた。

東京で二度目の定年を迎えて、札幌のお宅を建て直し、「墓守に戻ってきたよ。君と同じだね」といわれたのを記憶している。その新築祝いに伺って書齋を拝見した。本棚にどんな本があるのか不躰に眺めた。ところが、ごくありふれたものがあるだけで、先生の蔵書としては、貧しいとさえいえるものだった。

不思議そうな顔をしたぼくに向かって、先生は「空襲で苦労して蒐めた本が焼けるのを見たら、蔵書を抱えるのが馬鹿馬鹿しくなつてね、老後の楽しみの本さえあれば充分」と静かにいった。アメリカでチェコの亡命研究者 P.Horeckey 宅にホームステイした時も書棚を見て寂しい蔵書だと感じた。彼は議会図書館のスラブ部門の主任司書だったが自宅にほとんど本はなかつた。図書館の充実したアメリカの研究者というか、図書館人の潔さなのかと、その時は思つたものだ。今では亡命者としてT先生と同じように、本との別れをどこかで味わつたのではと、了解する。

数年後、先生がお亡くなりになって、奥さまにお悔やみに伺つたときだった。

学部長事務取扱として全共闘の学生たちに吊し上げられて怪我をした時だ。「今日は学生に怪我人はなかつたよ。ぼくは手を出していないし」と。

なかでも退職後の叙勲の話はとても印象深い話だった。先生は帰ると「勲章をくれるという話があつたよ。相談せずに悪かつたけど、断つたからね」とおっしゃつたそう。そんなことは、それまでも一度だけあつたという。先生は職業軍人の次男として札幌に生まれたが、お父上の勤務に従つて台北高校を卒業され東京帝大に進まれた。西洋史学科を繰り上げ卒業して東亜研究所に勤めるが、すぐに二等兵として高射砲隊に招集された。あの体格の先生まで招集するというのは日本帝国の末期を証明しているのだが。

兄上は職業軍人の道に進まれていたようだ。戦後、保安隊が作られた時に旧軍人として、加わると聞かされ、ぼつりと「これで、兄貴ともう付き合うこともなくなつたな」といわれたそう。戦後は決して台湾へは行かないということにも、通じるのかもしれない。

蔵書といい勲章といい、先生にとっては形あるものはいつの頃から無意味なものになっていたのだろう。先生のこんなことも忘れないうちにと、筆を執つてみた。

